

ロータリーワンポイント情報 丹羽 芳広 会員

3年前に経験した幹事についてお話します。前幹事の石井さんより資料を引き継ぎ頂いたのですが、昔の幹事についての面白い記事がありましたので紹介します。

私としては、政府でいえば会長が総理大臣で、幹事は官房長官かなと思っていたのですが、幹事は執行部門の代表者として内閣総理大臣に例えられていて、実務上の権限と責任を持つ、正副委員長や委員の選定、予算組み、会員の入退会、管理に対する実務事項は幹事を窓口として処理されていると、昔はそうだったらしいです。

ロータリークラブが社交クラブとして発達した歴史的背景から、クラブの取りまとめ役でもあり、世話役である幹事の存在は大きく、幹事の留任は奨励されていた。大阪のクラブでは13年間幹事を務めた方が居たり、その前ではシカゴのクラブで40年間幹事を務めた事があったとの事です。徐々に近年、幹事の権限が縮小されてきて、権限を会長に移す傾向が強くなってきました。

1962年RI理事会の決議によって、任期も他の役員同様1年間原則になった経緯があるようです。幹事も理事の1人ですが、なるべく審議部門にタッチしないというのが原則で、執行部門の代表者として発言、証言、勧告はするが、理事会や委員会の運営に関する権限を持たない。理事会の議長を務めたり、委員会報告の代行を幹事はすることはできない、実際は会長が理事会の議長を務めるべきである。幹事は決議に参加しない方が、決定事項を執行し易い。

たくさんある幹事の心得の中から、独断先行は絶対だめである。何があっても会長との意思の疎通を図ることあります。見よう見まねで1年間幹事を経験させて頂いて、貴重な体験をさせて頂きました。ロータリーを勉強される意味で、幹事を経験される方が大変良い事だと思います。

米山記念奨学生 釧路短期大学 コウ エケンさん

こんにちは、留学生生活の話をしてします。

日本に来て5年間が経てました、青春の20代の半分の時間を北海道で過ごしまして、他の留学生と同じで、辛い時もある、ホームシックの時もある、疲れた時もある、幸せな時もある。しかし、いつでもどこでも、心を暖かく感じさせる日本人がいます。

最初アパートを借りる時、保証人が必要です。でも、信頼関係が無いと誰でも保証人になりたくない事を知っています。当時のアルバイト先の料理長にお願いしたら、すぐに同意してくれました。

日本に来て最初の1年は、日本のあらゆる事に興味を持ちまして、食べ物も何でも食べてみました、納豆を食べられない日本人先輩がおりますが、私は美味しく食べられます。

それから、初めて本場の回転寿司もご馳走になりました、故郷の日本料理店の味と全然違います。美味しかったです。

冬になると北見の雪は驚くほど降ります。でも、仕事に行かなければいけないのですが、自転車も乗れないし、バスも間に合わないからアルバイト先の女の子が仕事に行く度に、遠回りしても絶対私を連れて行きます。日本で最初の冬は彼女がいるので、心暖かい。

この5年のうちに6回引越し、10種類のアルバイトをして、釧路短期大学に入り、また米山奨学生になる事は、この全ての時間と経験と出会いが私を成長させ、今のもっと自信のある私があります。励ましてくれる人、助けてくれる人、教育と知識を教えてくれる学校、経済面のほかに見識を拡げてくれるロータリー、恩返しとして一番良いのは、勉強を頑張っ、日中友好繁栄の為、世界平和の為に、貢献する事だと思います。

これが私の変わらない夢と目標です。ありがとう御座います。

第2500地区ロータリー米山記念奨学会前理事 北川 健二 会員

日頃はロータリー米山奨学会に、ご協力頂き感謝申し上げます。

最初に、私と米山奨学会の関わりをお話します。今から8年前芽室RCの高林さんがガバナーの時、釧路北RCのクラブ米山委員長を務めました。その時点まで第7分区からは、1人の米山奨学生の誕生もなく、更に米山奨学生と交流する場もなく、米山事業が遠い存在でした。その時点で当クラブからは1,400万円ほどを米山に拠出しており、このお金の一部でも地元の大学生あるいは、交通遺児で進学したい子供に使えないだろうかと考えました。それが、米山奨学事業に肩入れする転機が翌年訪れました。小船井さんがガバナーの時、第7分区に初めて米山奨学生が誕生しました。北海道教育大学釧路校の中国からの男性の大学院生を当クラブが世話クラブとなり、私がカウンセラーとなりました。彼を通して、米山奨学事業の素晴らしさを実感させて頂きました。翌年から米山地区委員長を3年間、財団米山の評議員を2年、そして本年8月まで理事を4年務めさせて頂きました。

それでは、米山奨学事業について、パワーポイントを使って説明します。

米山奨学事業とは、日本で学んでいる私費留学生（大学学部生、博士生、修士生、短大、高専、専修学校）に対して、1～2年間の支援を行っています。特徴としては、お金を支給するばかりではなく、奨学生1名に対して世話クラブそしてその奨学生を支援するカウンセラー制度を設け、奨学生の精神面及び人との繋がりを重視しています。

米山奨学事業の始まりは、日本で初めてのロータリークラブを東京に創立した、故米山梅吉翁（三井信託銀行、青山学院大学の創始者）が、日本が第二次大戦でアジア諸国に多くの苦しみを負わせた事を悔やんで、将来日本が生きる道は平和しかない、その平和日本を世界に理解させる為に、アジアの国々から1人でも多くの留学生を日本に受け入れ、平和日本を肌で感じてもらうしかない。この意思を東京RCが受け継ぎ、昭和27年に設立されました。5年後日本での全クラブが参加される事業に変遷して行きました。

平成16年にはRIから日本における「多地区合同奉仕活動」事業として認知されました。現在までの事業規模は、116の国から、15,130人の奨学生の受け入れを行っており、年間の奨学支援生は800名を数えています。日本における民間最大の奨学団体です。

事業資金は会員一人一人から頂いている普通寄付と、それ以外の特別寄付から成り立っており、会員皆様から頂いた年間14.4は全額奨学支援に使っています。

事務経費等は、基本基金・特別積立金の利息で運営しています。特別寄付は3万円で準米山功労者、10万円で米山功労者としています。尚、寄付金は金額を問いませんので、小額寄付でもOKです。また、寄付金には税金の優遇措置があります。国際ロータリーが行う事業としての相違点は、会員一人一人から頂いたお金が、全額奨学生の支援に使っており、詳細は会員に配布した「豆辞典」に載っておりますのでご参照下さい。

これから、奨学期間を終え母国に帰って活躍している、元米山奨学生（学友と呼んでいます）のDVDをご覧下さい。